

人の心を照らすグラスアート

野口真里さんのグラスアートは、宿泊施設や文化施設など、建築と一体化した大型作品が多い。空間構成も照明効果も計算し尽くされた作品は、スポットライトを浴びて眩耀し、行き交う人々を夢幻の世界へといざなう。

制作には、細かい砂を吹き付けて彫刻する技法。サンドブラストエッチングを用いている。削った箇所はすりガラス状になり、レリーフを形成する。ガラス工芸では一般的な技法だが、並行して積層接着を行うのが野口作品の特徴だ。左の水盤オブジェは、積層したガラスの間に花や葉を模して彫刻したガラスを挟み、接着している。この緻密な作業が、水をたたえた水盤のような奥行きを生み出すのである。

たり、外気にさらしてみたり。地震時には納品先に状態を確かめる電話もしました。10年経てばある程度の保証も得られますから、時間が経つのが待ち遠しかった」と当時を振り返る。

透明性の高いガラスの魅力

野口さんは創作活動に当たり、エフェメラル（儚い、短命な）、という言葉大切にしている。それは、消えゆく、というマイナスイメージではなく、水、空気、風といった、つかみ取ろうとしてもつかめない、無尽蔵にあふれ出てくるものだ。透明なガラスは、それらを表現するのに格好の素材だった。「桜は散りゆくけれど、繰り返し花を咲かせます。だからこそ美しく、これが、儚いものの美。だと思ふのです。おそらく日本人が持っている独自の感性でしょう。私のグラスアートをアバンギャルドだと感じる方は多いかもしれませんが、私はガラスを使い、この日本古来の美を表現した

いとも思ふのです」
もともと、見てくれる人には理屈抜きで「きれい」と感じてもらうことを大切にしている。実は東日本大震災直後、ガラスは壊れやすいとのイメージから仕事が激減し「何のために作品を作るのか」と自問自答していた。そんなとき横浜駅東口地下街PORTAのアートワークのコンペに参加する機会を得た野口さんは「自分が生まれ育った横浜から、海でつながる東北東海岸にエールを送りたい」と企画を立案。「美しいものは人の心を照らし、力を与える」との思いで一大アートワークを手掛けた。この体験が今のモノ作りの核になっている。

「世界中の人に見てもらえる、移動型の『ガラス庭園』を造りたい」と目を輝かす。憧れは中国「黄龍」に見る、棚田のように広がる一面水の世界……。壮大な夢に向かって、挑戦は続いている。

取材・文 辻啓子



ザ・リッツ・カールトン香港 Tosca 2011



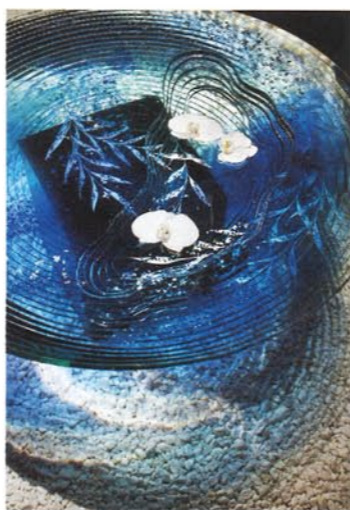
マリアージュ キラリト ギンザ店
「玻璃の翼」(部分) 2014



ザ・リッツ・カールトン東京 チャペル
「Photon Feast」 2010



横浜駅東口「PORTA 横濱三塔物語」 2011



ザ・リッツ・カールトン京都 La Locanda
「彩綴り」 2013



アーキテクチュア
グラスアーティスト

野口真里さん

野口真里(のぐち・まり)
1962年、横浜生まれ。東京造形大学デザイン科卒。内装関係の作業を手伝うなかでガラスに魅せられる。89年に「グラスアトmarino」を設立。95年、日本ディスプレイデザイン協会ディスプレイデザイン優秀賞を受賞。2002年に独立し「マリエンバード工房」を創設。「リッツ・カールトン東京」メインロビーのガラスタワー&チャペル、「ヤマハ目黒センター」のガラススクリーンなど、ホテル、学校、商業・公共施設に作品を提供。日本におけるアーキテクチュアグラスアートのジャンル確立を目指す。